

# 収蔵品展 やきもの入門

— 多治見の古代中世編 —

## すえき 須恵器

5 世紀に朝鮮半島から日本へ技法が伝わった薄くて硬い灰色のやきものです。多治見市では、8 世紀に生産され、窯業生産の原点となりました。



北丘 35 号窯出土 須恵器 碗

## かいゆうとうき 灰釉陶器

植物の灰を原料とする釉薬が初めて施された奈良時代末から平安時代後期のやきものです。初めは上流階層で用いられ、次第に庶民にまで広がりました。多治見市域では 9 世紀後半に生産が始まり、一大産地となりました。また、多治見市内では高級品である緑釉陶器も生産しています。



北丘 8 号窯出土 灰釉陶器 長頸瓶

## やまぢゃわん 山茶碗

11 世紀後半～ 15 世紀にかけて、東海地方で作られた釉薬をかけない碗・小皿を主体にしたやきものです。碗の高台に粉殻痕があるのが特徴で、大量生産され庶民にまで広がりました。日常雑器を中心として生産しており、地元で消費されました。



明和 1 号窯出土 山茶碗 碗・小皿

## おおがま 大窯

16 世紀代に、「大窯」とよばれる窯で焼かれたやきものです。灰釉や鉄釉をかけた製品が焼かれており、天目茶碗・小皿類・すり鉢等があります。また、茶道に使う茶陶も作られました。安土・桃山時代になると新たに「瀬戸黒」や「黄瀬戸」、「志野」などが生産され、陶磁史の中での画期となりました。



小名田窯下窯出土 天目茶碗

※展示期間等に変更となる可能性がありますのでご了承ください。